

「徹、ご飯よ。」母さんの声が聞こえる。すぐに返事をする気になれない……。今日は進路決定についての三者面談だった。友だちのほとんどは第一志望の学校が決まっている。それなのに、僕はまだ決められずにいた。僕は勉強とサッカーを両立させながら高校生活を送りたいと思っている。両親は、勉強が中心の、大学進学率の高い高校へ行かせたいと考えている。自分の進路のことだから、自分で決めたいと僕は思っていた。でも、テストの成績も思うように伸びず、自分の思いを二人にはつきりと話すことができないまま今日の面談を迎えてしまったのだ。当然、先生の前でもはつきり話すことができなかった。

「いつになったら決めるの？他の人は決まっているのよ！」帰り道、母さんは僕に向かって強い口調で言った。「いつもは『人は人、徹は徹』って言ってるくせに。自分の進路ぐらい自分で決めるよ！」僕は思わず大声で言い返していた。

「早く下りてきなさい。お父さんも待ってるのよ。」もう一度言われて、しかたなくのろのろと動き出した。ゆっくり階段を下りると、僕は不機嫌な顔で座った。そんな僕を見ながら母は、「誕生日おめでとう。これ……。」

と言いながら小さな木の箱を大事そうにケーキの脇に差し出した。今日は僕の誕生日だった。母の隣りでは、父が静かにその様子を見



いか？」

特に急いでいるわけでもなかったのですが、僕は言われるままに工房の中に入って見た。松山さんは工房の中を案内しながら、桐箱の歴史や工程の説明など、いろいろな話をしてくれた。桐の木は燃えにくく熱にも強いことや、湿度の調節を自分でするので、桐箱の中は一定の空気を保つことができることも教えてもらった。

「桐の木には箱の中の物を虫から守るはたらきもあるんだよ。着物や、宝石をしまっておくには、いちばん合ってるんだよ。」

着物や宝石？母さんが大切にしている物ばかりだ。それと僕のへその緒が同じくらい大切だということ？いや、それ以上？

「僕の両親がこちらを訪ねたときのことを覚えていらっしやいますか。」僕は思いきって聞いてみた。

「もちろん、覚えているよ。二人ともきみのへその緒を大事そうに持ってこられてね。『これは私たち親子をつなぐ絆です。その証としていつまでも大切にのっておきたいのです。そして、いつかこれを見せて、この子が生まれたときのことを話しながら、私たちの思いを伝えてやりたいんです。』そんなふうに話されていたなあ。」父さんと母さんがそんなことを。

「二人の言葉を聞いて、私も両親と同じ気持ちでこの仕事をさせてもらおう。きみがこれを見たときに、職人としての私の思いが伝わるような桐箱を作ろう。そう思



ている。何だろう。箱のふたをゆっくりと開けてみる。中には小さくてまるいものに短い管がついたものが入っていた。

「これ、何。」僕は不機嫌なまま母に尋ねた。

「へその緒——赤ちゃんとお母さんをお腹の中でつないでるものよ。」

これが僕の体に？母さんのお腹の中でつながっていた？どうして今さらこんな物を僕に見せるんだらう？

「あれから十五年か……早いものだね。」それまで黙っていた父がぼつりと言った。

「これがどうかしたの？」素直になれない僕はぶつきらぼうに二人に向かって言う。

「お前が生まれた時、どうしてもへその緒をとっておきたいって母さんが言い出したんだよ。大切なものだからね。それなら桐箱に保存しようということになって、その工房にお願ひしたんだよ。ほら、おまえも知ってるだろ、中学校の近くの工房だよ。」

(きりばこ?)聞き慣れない言葉だった。へその緒、桐箱——僕が生まれたことと何の関係があるんだらう。気にはなったけれど、このところの母さんとのやりとりを思い出すと、これ以上話す気持ちになれなかった……。それから両親、特に母さんとはあまり口をきいていない。口を開くと進路の話になるとわかっていたので、僕は二人から逃げるようにしていたのだ。

「あれ、きみは。」ある日の学校の帰り道、両親が桐箱を頼んだという工房の前を通りかかると、中から声をかけられた。その方は松山さんという方で、工房の中でもいちばん長く働いている方だった。

「大きくなったなあ。もう中学三年か。どうだ、少し寄っていかな

ってこれを作らせてもらったんだよ。」と松山さんは教えてくれた。

さらに、「私の作ったものをどんな方が買ってくれるのかわからないけれど、使う人の気持ちになって、いつまでも大切に使うてもらえるような桐箱を作りたいと思いつながら、この仕事を続けてきたんだよ。」とも話してくださった。

「今日、工房の人に声をかけられたよ。父さんと母さんが桐箱を頼みに来たときのことを覚えてるって。」

両親は少し驚いたように僕の顔を見た。

「何か聞いたの？」恥ずかしそうに母さんは僕に尋ねた。

「うん。いろいろと……。父さんと母さんは僕が生まれたことをとても喜んでくれたんだね。」母さんは黙ってうなずいている。

「父さんと母さんだけじゃない。僕はみんなに守られて大きくなった。周りの人みんなが僕のことを思ってくれてるんだね。」桐箱を見つめながら僕は続けた。

「僕は高校に行っても勉強とサッカーを両立させていきたいと思ってる。だから、それができる高校に行きたい。将来は選手の気持ちで大切にしながら育てていける指導者になりたいと思う。うまくいくかどうかかわからないけど、逃げずに勉強して頑張るよ。」僕は二人に向かって力強く言った。